

凱風通信



根腐れしつつある言論世界に渴!

2010年4月15日
第15号

凱風社 図書出版

編集人：小本 卓
共同発行人：新田 準
制作：新田 準

〒112-0004
東京都文京区後楽 2-2-15
☎03-3815-7633
☎03-3815-9510
郵便振替：00150-0-88715

URL
<http://www.gaifu.co.jp/>

新刊 5月中旬刊

〈本に拠る—第一巻〉 ジャーナリズム考

【著者】米田綱路 元「図書新聞」編集長、フリーライター
四六判上製・832頁 定価5000円＋税 ISBN978-4-7736-3404-4

元「図書新聞」編集長、現フリーライターが、書評という表現をもって書き継いできた文章を土台にして加筆・書き下ろすシリーズ〈本に拠る〉の第一巻。消費社会・情報化社会のなかで権力批判という公的な責任を放棄し根腐れしつつある言論世界。「I—ことばで対峙する」「II—新聞の言論と自由」「III—本づくりの根っこ」「IV—メディアの現在形」の四部構成で活字ジャーナリズムの可能性を多面的に追究。「精神が吹き込まれたことば」よりほかに武器無き無冠の帝王・ジャーナリズムは「個の戦線」においてしか存在しえないのではないか。



人文社会系の書物でのごだが、論点を提起し、読者の想像力を喚起させ、歴史の検証に真摯に向き合っ書かれたものが作品とされ、また、国家（権力）や社会（世間）や多様な「常識」を回避することのできない「個」としての私たちに何がしかの可能性や希望を共有させてくれるのが思想を湛えた魅力的な本と

ノンフィクションとルポ、新聞と出版、文学・哲学におけるジャーナリズムの可能性を追求

されるのであれば、出版点数として毎年八万近い本のうち、はたしてどれぐらいがそれに値するものであろうか。ハウツー本や損得指南本（実用書）という、いつの時代にもそこそこ流行る定番を除けば、少なくとも人文社会系の本は本場に読まれなくなっている。

ケータイにお金がかかる、知識・情報を得る手段に本より便利なメディアが沢山登場してきた、読書の習慣が育まれてこなかったために読むのがシンドイ・メンドイ、カネもヒマもない—などなど、本が読まれなくなっている理由を二つに求めることはできないが、そうした外的要因のほかには、本の版面を形成している「ことば」の次元で、すでに墮落が進行してしまったからではないだろうか。人間の精神を自由に生かす命を吹き込み、創造（想像）を掻き立てるのが「ことば」であったはずだ。しかし、「平庸な日常」のなかに潜む可能性やウソを浮き上げ、見えないものを顕在化させる力やアウラを感じさせることばに出会うのは今やめつたにない（例えば「わかりやすく」という目的—読者のニーズに応えようとするためか、類型化・図式化された日常語で綴られた本のオンパレード）。

——歴史と思想と詩。『ジャーナリズム考』で論じるテーマ群は、このトライアングルのなかにある。読書と書評、インタビュールと取材などをもとに、アジア・太平洋戦争前から戦中戦後、今日にいたるまでの言論表現をたどる。内容は新聞と出版、ノンフィクションとルポルタージュ、文学と哲学など、活字ジャーナリズムの全般にわたる。いま、活字ジャーナリズムは不振が続ぎ、確実に衰退している。編集現場において、そのことを痛切に感じつつ、その流れをなんとか喰い止めたかと考え続けてきた。徒手空拳で奔流を押しとどめられるとは思わなかった、不定型な波紋ならばつくることができるとも思えない。本書はそう念じて書いた、ささやかな礎である。

ジャーナリズムとは何か。永遠の命題だが、現象や情報を速報・スクープすることだけがその役割ではないはずである。一つには、無意識に埋め込まれた定型に収まらず、ものごとを過去の忘却に押し流す時間に抗いながら、伝えていくことで広がる表現の空間性に賭ける。自分の周波数で捉えた波動にことばをのせて、波紋を広げていくことである。

忘れられた過去を現在に呼び戻し、未来に投企するというプロセスに、それは深く関わっている。なかでも本を読むことは、そのわけ過去に比重を置くことである。本というメディアの性質からして、急な速度にはなじまない。著者もそうならば、読者もそうであろう。

十数年のあいだ雑誌編集の仕事に関わりながら、本と出会ってきた。これまで活字の表現者たちがどのような仕事をし、何を考えてきたのかを知って、触発されてきた。逆にいえば、触発されない現実や現状に逆らってきた。表現されたものを、自分の日々

著者紹介■米田綱路

1969年奈良県生まれ。大阪大学大学院言語文化研究科修士課程修了。新聞社、出版社をへて現在、週刊書評誌「図書新聞」スタッフライター、上智大学文学部新聞学科非常勤講師。

【著書】『モスクワの孤独——「雪どけ」からプーチン時代のインテリゲンツィア』（現代書館、2010年）

【編著】『はじまりはいつも本——書評的対話』（パロル舎、2006年）、『抵抗者たち——証言・戦後史の現場から』（講談社、2004年）、『語りの記憶・書物の精神史』（社会評論社、2000年）

の仕事のなかに引き寄せながら、今日につながるように読み解く。さまざま歴史・社会的事件をとどめて、先行者たちの思想と行動をたどり、過去と未来のあいだにページを開くのが日課となった。

日々、ページをくりながら文章をつづる。本を読んで書くことは、自分のなかで起きた化学反応を、さらなる読者に伝えていく行為だと思ふ。書評とは触媒のようなものだが、たんに本を紹介することではない。一冊一冊では完結し、単独であるように見える本を、記憶の天体に浮かべながら、それが何らかの星座の一点を担っていることを幻視するようなものである。

書評というジャンルを超えた活字ジャーナリズムの可能性への試みは、人間の知的な所産に、読み手が個性でもって文脈を与えていくことだ。文脈の数が多ければ多いほど、そして文脈が交錯して脈動が高まっていくほど、精神の天球は星々に満ち、夜が深まって、ただ暗いままの闇ではなくなるだろう。

（初期印刷本）

グーグル・ブック検索が惹起した事態／知恵蔵裁判が投げかけた問題／大輪盛登の活字論と出版論

●第14章 「職業としての編集者」——吉野源三郎の歴史哲学とジャーナリズム

藤田省三の「戦後精神の古典的形態」／吉野の「思想動機」について／現実には喰いこむために

●第15章 出版人たちの相貌——高橋昇内川千裕、松本昌次、小尾俊人、西谷能雄、柏原芳光

月刊誌「技術と人間」の歩み／民衆史とともに歩んだ出版人／生涯を賭けて、ただひとつの歌を／出版という「昨日と明日の間」／頑迷固陋に志としての出版を問い続ける／「昨日の世界」の筑摩書房

●第16章 ブックデザインと印刷の仕事師たち——田村義也、長谷川憲一、貝原浩、鈴木一誌

装丁編集者と戦後／灼熱の地獄を経た活版印刷／ラディカルな含羞の画伯／重力に堪えて生成する版面と画面

●第17章 本をめぐる風景——ナウカ神保町店、書肆アクセス、駸々堂書店、東京堂書店・小島清孝

ロシアへの窓が閉じる／地方・小出版の情報発信の場／駸々堂書店閉店を悼む／小出版社を愛した書店人／書店という劇場の演出家にして舞台監督

●第18章 フォト・ドキュメンタリーの世界——本橋成一、樋口健二、趙根在、豊田直巳

見えないものを撮るドラマ性／打ち棄てられる人間を撮り続ける／事の根、その深きところへ／イラク戦争に見たヒロシマ

●第19章 冤罪と死刑——刑事司法の「正義」——免田事件、犯罪被害者と死刑囚、安田事件

司法犯罪の暗黒／死刑に引き合い続ける／露呈したオールジャパン体質

●第20章 六〇年後の松川裁判——新たな研究・回想と広津和郎の精神

占領下でフレイムアップされた国鉄事件／警察と新聞の癒着、米軍の影／広津和郎の裁判批判のモチーフ／無罪判決までの四年と広津の散文精神／持続した裁判批判のエネルギ

●第21章 未完のオウム裁判と下山事件——麻原裁判と「下山病」

千尋の谷を飛び越えたオウム／「魔女裁判」の七年一〇カ月／「下山病」に取り憑かれた人びと

●第22章 歴史の事実と歴史学の実践——家永教科書裁判、大量虐殺の社会史研究／「事実の場」をめぐる争点／「歴史化」と事実究明

●第23章 メディア規制が進む時代のなかで——報道被害、〈口封じ〉訴訟、志布志事件、朝日新聞阪神支局襲撃事件

表現の自由と知る権利／松本サリン事件と「魔女狩り」のメディア／恫喝めいた新手段の規制／現代の「真昼の暗黒」／朝日新聞阪神支局襲撃事件を再考する

●第24章 沖縄密約とジャーナリズムの敗北——西山記者事件、沖縄密約文書開示請求訴訟

日米安保と核密約／沖縄返還交渉における密約／沖縄「買い取り」の実態／スキヤンダルにすりかえられた知る権利／沖縄密約をめぐる新たな動き

●第25章 総合雑誌の消滅、横浜事件の教訓——『月刊現代』休刊と再審免許

ノンフィクションは「自死の共同体」をえがけるか／横浜事件の再審免許と「被害

者史観」／出版社、編集者の言論統制への参画／総合雑誌の弱さ、当事者意識の稀薄化

* * *

そして、著者は本書の狙いをこう述べる。——二世紀の暗い時代には、前世紀から引きずってきた歴史的なテーマが疼いてい

る。そして、いまに露出したその意味は、いま読み解かれることを求めている。それに応えようとするのもまた、ジャーナリズムの重要な仕事の一つであろう。

……「本書に収めた」文章をおして一貫して追究するのは、歴史認識をめぐる問題である。出版や新聞など、活字メディアの近現代史をたどりながら、そこに生きた表現者の姿をおして、いまを深めていくジャーナリズムの精神をえがこうとした。

以上のように、本書は単なる書評ではなく、先行者の思想と行動と、時代の相貌を現代につなげようとした言論史である。

電子本に関する見出しが紙誌面を飾るところはもう珍しくなくなった。アマゾンの電子書籍端末「Kindle」の普及、グーグルのブック検索、国立国会図書館の電子図書館構想という用語から、絶滅危惧種といわれて久しい我々小出版社は将来、圧倒的な資本力をもつコンピュータソフト会社の下請けとなり、経済合理性を至上目的に「デジタル・コンテンツ」をつくっているという姿が想像されてならない。そこでは、本書に登場するような編集者は勿論、装幀家も製本所・印刷所・用紙店も必要とされない。言論の商品化も加速するだろう。

そんな情況下、ジャーナリズム（言論）の精神をいかに将来へリレーしていったらいいのか、本書はそれを如実に語ってやまない。言論人の必読書である。（小木）

な精神

II—新聞と言論の自由

●第7章 ジャーナリズムにおける腐敗の構造——言論統制と新聞社、そして「押し紙」

闇に消えた文学報国会／新聞と戦争の因縁／組織と個人の相剋／占領下の新聞とG

HQ／新聞販売店が抱える闇の構造

●第8章 戦後日本に引き継がれた時代経験——小川五郎、増山太助、そして瀧川事件、読売争議

全体主義の時代経験をくぐりぬけて／学問の自由・時代精神の広がり／読売争議の証言者が逝く

●第9章 言論の自由の脈流——憲法、横浜事件、『風流夢譚』事件

改憲潮流を超える系譜学／二つの事件と言論機関／『風流夢譚』事件を問い続けた二人の記録／状況的存在としての出版

●第10章 戦中・戦後を生きた新聞人たち——松本重治、藤田信勝、森正蔵、須田禎一、池宮城秀意

日中米関係の和平に尽くす／毎日新聞記者たちの敗戦日記／安保改定を批判した稀代の論説記者／占領下沖縄で自立を問い続けた論跡

●第11章 戦後精神の古典的形態について——思想体験の交錯、批判的知性の課題

「京城日報」編集局の光景から／直面する思想課題と戦後日本／朝鮮認識の弱さ／平等を体現する精神の古典的形態

III—本づくりの根っこ

●第12章 批評の精神、図書館の美学——戸坂潤、中井正一

ブック・レビューとジャーナリズム論／「真理がわれらに自由にする」ための実践

●第13章 グーグルからグーテンベルクへ——デジタル化時代のインキュナブラ

書評という表現行為をとおして考察された現代ジャーナリズムの地平は八三二ページの大著にまとまった。以下はその内容である。

【目次】

——ことばで対峙する

●第1章 ノンフィクションとフィクションのあわい——辺見庸

「気分」でしかないことばの彼方へ／「遠音」を聴く、そして「見る」／日常と痛み、恥辱からの表現

●第2章 自立と自律を探るルポルターージュ——鎌田慧

「これによってなにかを始められる」ために／地域の間まを映し出す地方紙／むのたけしと斎藤茂男

●第3章 ジャーナリズムとは何かを問い続けたジャーナリスト——筑紫哲也

——一時と一時のあいだの男／多事争論、自由と寛容の精神／権力を監視する使命——ウォーターゲート事件とロッキード事件

●第4章 戦後が戦後であった時代への賛歌、哀歌——本田靖春

畢生の社会部記者は死んだ／ノンフィクションが問う国家と個人

●第5章 「いのちぎ」する記録文学——松下竜一

大道寺幸子さんの死／爆弾闘争と「あの時代」／国家への不信、国家との戦争／国家からの、自分自身の解放

●第6章 近代ジャーナリズムの先駆者たち——成島柳北、陸羯南、太田朝敷、宮武外骨

出現した操觚者たちの言論史／遺臣の文人ジャーナリスト、成島柳北の気質／「国民主義」の言論と営利の矛盾を生きる／近代沖縄のジャーナリスト／スコブル今日の

文書を廃棄した外務官僚の犯罪を追及し、沖縄住民を騙した返還交渉の欺瞞的構造を明らかにすべきだ。

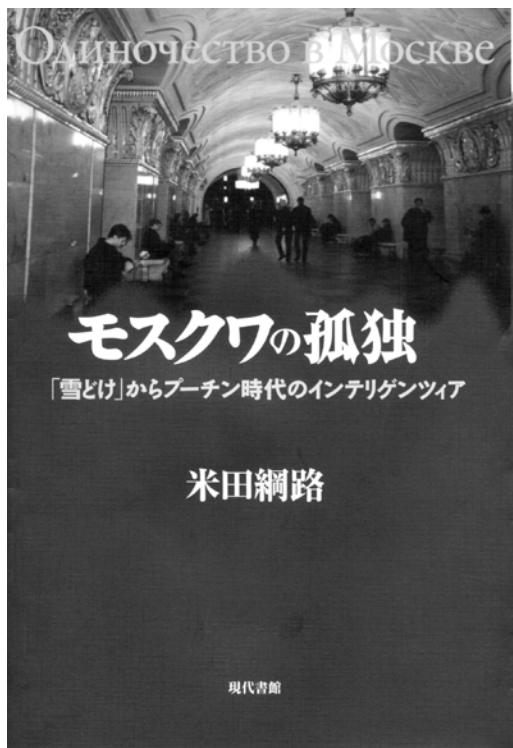
よねだこうじ
米田綱路



米田さんの新刊が現代書館から出版されました。

二段組六二八頁の大著です。

「当時（ベルリンの壁が崩壊した八九年）は、日本のメディアが流す識者の状況分析や、紙面や画面に次々に登場する研究者たちのニュース解説にあきたらず、なんとか自分で読めないかと、辞書を頼りにロシアやドイツの新聞を読んだ。それが二十世紀ロシアと出会うきっかけだった」（あとかぎ）。米田氏はそれ以来、モスクワ・ベルリンなどの取材訪問、文献渉猟、研究を重ね、そして出来上がったのが本書『スクワの孤独』である。「歴史と記憶」をことばで伝えることは何か、という問題意識は近刊『ジャーナリズム考』にも通底する。一体何が変わって何が変わらなかったのか——活字ジャーナリズムの精神は果たして生きつづき得るか。（小木）



現代書館、2010年3月
四六判 628頁 定価 4000円＋税

三月二十九日付「東京新聞」夕刊に、名護在住の作家・目取真俊氏が沖縄密約について寄稿した。沖縄密約とは、沖縄返還交渉のさいに日米間で結ばれた核兵器の再持ち込み、土地の原状回復費の肩代わりなどに関する秘密合意のことを指す。密約文書の調査に当たった外務省の有識者委員会では先ごろ、原状回復費肩代わりについては「広義」の密約があったとしたが、核再持ち込みについては密約とは言えないと結論づけた。それに対して目取真氏は、当時のニクソン米大統領と佐藤栄作首相が署名した核再持ち込みの「秘密合意議事録」が持つ意味はそんなに軽いものなのか、核密約の度合いはより深いのではないのかと問うた。

【当】時の沖縄住民に、「核ぬき」ということばがいかに重みを持ったか。目取真氏は一九六八年二月、B52が嘉手納基地内で爆発炎上した事故にふれている。核兵器が貯蔵されていた知花弾薬庫への激突は、間一髪で逃れたものの、核の恐怖が沖縄を覆った。一歩まちがえば「沖縄島は消えていたかもしれない」と目取真氏はいう。佐藤首相が掲げた「核ぬき・本土なみ」

返還が沖縄住民を強く引きつけた背景には、一つこの恐怖があった。だが、「核ぬき」は政治の詐術であり、いったん核兵器を撤去して沖縄住民の復帰願望をかきたたすに見せながら、ふたたび持ち込み密約が交わされた。そして「本土なみ」の復帰とは、米軍基地と抱き合わせた。核密約と原状回復費の肩代わり密約は、「核ぬき・本土なみ」の欺瞞性を示す証拠だった。

【沖】密使としてキッシンジャー大統領補佐官と秘密交渉を進めた国際政治学者・若泉敬が、一九九四年に『他策ナカリシフ信ゼムト欲ス——核密約の真実』（文藝春秋、二〇〇九年に新装版）を世に問い、秘密交渉の舞台裏を暴露した。だが、政府は若泉の告発を黙殺し、その後も一貫して密約の存在を否定した。先頃刊行された後藤乾一『沖縄核密約』を背負って——若泉敬の生涯（『岩波書店、二〇〇九年』）によれば、若泉は自分の志と理念を、「愚者の楽園」と化した日本社会に訴えるつもりでこの本を書いた。彼は返還後も在日米軍基地の七

五パーセントが沖縄に集中する事態が続いていることに失望し、沖縄県民に嘘をついたという悔恨の念をぬぐい去ることができず、贖罪の巡礼を続けて世を去った。

【若】泉の使命感と気負い、失望は彼個人はなかった。豊田祐基子『共犯』の同盟史——日米密約と民主党政権（『岩波書店、二〇〇九年』）によれば、外務省関係者は若泉に対し、あなたがたがなくても沖縄は返還

されたと、べもなかった。そして彼らは、沖縄密約関連の文書を、二〇〇一年の情報公開法制定を前に秘密裏に廃棄したと見られる。有識者委員会でも関連文書の欠損が指摘されたが、廃棄した当の官僚たちが罪に問われることはない。罪悪感などさらさらないだろう。核密約の交渉に当たった関係者には、「沖縄島は消えていたかもしれない」という危機感など関心の埒外だった。こうした意識構造は、沖縄と日本との関係を現在まで規定している。

【す】で一九七一年、新崎盛暉氏は「沖縄の戦後史——帝国主義的再編と人民の抵抗史」（『未完の沖縄闘争』凱風社、二〇〇五年、所収）で、日米の軍事的・政治的体制を前提にして「七二年、核ぬき・本土なみ」返還が語られているが、「すべて事前に予測された」とおり「核つき・在日米軍基地の自由使用保証」による返還というべきであった」と述べた。同年に書いた「沖縄国会を越えて」（同書所収）では早くも、日本政府の進める沖縄返還の力ラクリを読み解いた。

【米】国が支配している沖縄を返還してもらうからには、米国に協力して沖縄を返還しやすくする必要があることを国民に強調しながら、「核アレルギー」を和らげるために「核ぬき」を謳う。一方で、自前の軍事力を制約している憲法の平和主義を空洞化させるためには、米国の軍事力を活用する必要がある、そのために「本土なみ」を謳いながら基地はそのまま握え置く——こうした力ラクリは、既得

権益としての基地を手放さない米国の思惑に沿ったものであり、日米両国は基地維持の経済負担を肩代わりすることまで取り決めた。

【密】約問題が明らかにしたのは、米国が一貫して利を得続ける構造である。『国策のまちおこし嘉手納からの報告』（凱風社、二〇〇九年）で基地と沖縄経済の実情をレポートした渡辺豪氏は、前者『アメリカとムチ』の構図——普天間移設の内幕

（沖縄タイムス社、二〇〇八年）で、基地移設問題は米国にとっては日本側の「コップの中の嵐」でしかなく、自分は「二人勝ち」であり続け、どう転んでも損をしない仕組みになっていると指摘した。沖縄返還交渉とは、密約によってこの仕組みを作ることであったのである。

【沖】縄密約問題の本質はそこにある。解決するには、この仕組みそのものを壊すしかない。



ISBN978-4-7736-2902-6
四六判 544頁 定価 3800円＋税